

絵高麗

- 尚徳校跡から出土した鉢 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した絵高麗の鉢 側面(上)・内面(下左)・底部(下右)

はじめに 2005年、尚徳中学校跡地(下京区^{ようばい}楊梅新町東入る上柳町)の発掘調査で、江戸時代前半頃の地層から、思いもかけない陶器の破片が見つかりました。

出土した遺構は、町家の裏庭に掘られた長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.7mほどの長方形のゴミ穴でした。

出土状況 調査区には町屋が建ち並んだ跡がありました。当時どこの家でも、普段の生活から出たゴミは敷地の裏に掘った穴に廃棄していました。このゴミ穴から出土した遺物は、土師器の皿や信楽焼の播鉢、肥前磁器といった日常使いの雑器が主体で、そのほとんどは見慣れたものでした。

出土した鉢 その中でクリーム色の地肌に茶色の文様を持つ陶片は、ひととき目立っていました。



写真2 絵高麗唐花文鉢 根津美術館蔵

破片は全体の3分の2ほどが残っており、文様構成などもわかりません。器は口径19.5cm・高台径7.5cm・高さ7.8cmの鉢に復原できました(写真1)。

絵柄は、白土で化粧した上から鉄絵具で描かれ、この上に掻き落として線描を加えたものです。唐花と呼ばれる花と蔓草のような文様が3箇所配されています。口縁端部の内外面には二重に線が引かれ、外面下半分には化粧土を塗っていない部分に、はみ出して太い線が引かれています。伸びやかで、いかにも描き慣れたタッチです。

この器は、何枚も重ね焼きできるように内面の底を幅広く蛇ノ目状に釉薬を剥ぎ落としてあり、高台はがっしりとした形に削り出されています。土は微細な褐色粒を多く含んでいますが、均質で鈍い黄橙色です。内面の底や高台の下端は擦れて滑らかになっており、長い間使用されていたことがわかります。

えこうらい
絵高麗 鉄絵のある磁州窯系陶器は全国に出土例がみられ、京都市内でも平安京左京三条三坊出土

の陶製枕(写真3)をはじめ、室町時代の遺物を中心に数例が確認されています。ただ、今回の鉢は、それらと趣きが異なるようです。

このような特徴をもつ製品は日本の陶磁器ではなく、「絵高麗」と総称されて伝世している作品に近いようです。「絵高麗」は白化粧土の上に鉄絵文様がある陶器で、中国磁州窯系の焼物とされています。そこで改めて「絵高麗」と呼ばれている製品を調べると、茶の湯の世界で、「絵高麗唐花文鉢」(写真2)と名付られた伝世品が存在することがわかりました。これこそ捜していたものです。

この鉢は作りや文様が奔放で無造作なことから、本来は雑器として取り扱われていたものと思われる。このことがかえって珍重され、茶道具として見立てられたものと想像できます。

しかし、これまでに伝世品として確認できる唐花文鉢は3例のみで、遺跡から出土した例は今回紹介した鉢が初めてですから、日本に伝来した製品はそれほど多くはなさそうです。

近年の研究では、これらの碗類

の生産地は具体的にわからないものの、もたらされた時期は磁州窯が最盛期であった元時代(1271~1368年)ではなく、16世紀末から17世紀初頭であった可能性が指摘されています。もしそうであるならば、17世紀中頃と推定される今回出土した鉢の遺構年代にも近く、同じ頃に中国華南地方や東南アジアの陶磁器が多量に茶陶としてもたらされていることにも重なります。

おわりに それにしても、何故この鉢が京都のこの場所に埋もれていたのでしょうか。1つの発見から新たな疑問が生まれます。この「絵高麗」と総称される焼物は、尾形乾山けんざんや永楽保全えいれくといった京焼の陶工にも強い影響力を与えており、さかんに「写しもの」が製作されています。

今回の調査では乾山銘の碗(写真4)も出土しています。乾山窯風の創意はみられますが、基本的には「絵高麗」の技法を採用しており、大変興味深いことです。想像は膨らみますが、それも今後の研究課題です。

(能芝 勉)



写真3 平安京左京三条三坊出土の陶製枕



写真4 乾山銘の碗